
~ 鏡 ~

岸田高貴

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（鏡）

【Nコード】

N0261Z

【作者名】

岸田高貴

【あらすじ】

夢と現実の冒険世界

バトルありLOVEありそして少々のエロ

登場人物は個性的なものばかり。

主人公は現実世界へ戻れるのか！？

ブローグ

「ブローグ」

僕は時々思う「これは夢なのだろうか。それとも、現実なのだろうか。」と考えながら一人で歩いてきた。

ところで、ここがどこなのか僕にも分からない。

言っちゃああなたが、教えて欲しいものだ。

確かこれは夢だったはず・・・？

ダメだな喋っているのか思っているのかもわかんなくなってきた・

そんな感じで、多分結構な日が続いている。

（「こんな感じで、数日間いや正確には6日間、歩いているのは崎岳^{さき}流^{りゅう}である」）

今から、6日前。

いつものように朝起きて鏡の前に立つ崎岳の日課である。

（ここで、今日も決まっているな。なんて思っていたら、気持ちが悪。ヤバイ寒気がしてきた。）

「ここであれが来るんだよな。」

『ながるゝ早くしないと遅刻だYO！』

（俺の名前を「ながる」と呼ぶのは、幼馴染の永墨^{ながすみ} 智吾^{ともわ}である。

ついでに、こいつは文字だけ見たら必ず男子と思われる、確かに性格的に男なのだが。しかし、黙っていればすごく可愛い子だ。）

（ながるじゃなくて、りゅうだって。）と思いながら、

「わかってるって。」と答えておこう。またどうせいつものだ。

いつものワンパターンにそろそろ飽きてきてたころだなあ。と思った時だった。

いつものようにドアが開き、俺に向かって通学用バックが飛んでく

る。それをクールにかわすはずだった。

ドアを開くまではいつも通り、そこから、バックつ。(っで、あれ

?なんだこれ。)

まさかのドロップキック「グハッ」

そこからの記憶なし。

そしてこの場所にやって来た。

第一章 RING the ring

第一章 RING the ring

「あゝ、疲れたア」

（ん、暇つぶしなら乗ってやるぜ）

（いきなりどこからか声が聞こえてきた。しかし・・・）
「?!」

「自分の思っていることすら違ってくるようになってしまったか。」

（おいおい、そこはびっくりしろよ。）

「一回びっくりしたみたけど、ダメだったか？」

（でも、お前の心の声じゃないんだなあ）

「じゃあ、どこ。もしかして・・・」

（実際痛いんだけど、あ、足踏んでるんだけど。）

（崎岳は、足元を見てみたが、何もない。よくよく見てみれば、
・・・）

「リング？まさかっ ふっ」

（それデース。リングですよぉ）

「どれどれ？」

（一応、崎岳はリングを拾っておいた。持ってるのもなんなので
指につけようかと思ったら・・・）

（ちよっ。まった。兄さん勝手に付けられちゃあ困るねえ）なぜ
かリングが指に入ろうとしない。大きさが違うわけでなく、磁石で
反発されているような感じがあった。

「なんで。入らな。い、ん、だ？」

（俺の力、つきたいなら俺の条件を呑みな。）

「条件ねえゝやだやだ。めんどくさいから、捨てるよ。」

（おいっ。ちょ。おまっ。捨てるとかマジねーわー）

「だって条件だなんてめんどくさいじゃん」

（分かった、とりあえず聞こうぜ。条件を・・・？）

（（崎岳は、リングの話を聞かずに地面にリングを置こうとした。）
）

（いいから、条件なんてどうでもいいから。とりあえず一人にしないでください！！）

「あら、いきなり敬語になった。じゃあ、遠慮なく。」

（順応はやっ。まあ、いいかあ）。ん？でも、付けていいなんて言っていないなあ。あれ。くっ、してやられた。）

「ところで、君の名前は？」

（（崎岳は、リングの名前を聞きたかった。））

（そうねえ、じゃあ一応・・・）

「決まっていらないなら僕が決めよう。」

（えっ。えええ）

「そうだなあ、BLACK RINGでどうだ？」

（そうか、何で英語だし。まあいいやあ）

（（タラタッタタタ、新しい仲間BLACK RINGが増えた。という感じで新しい仲間が増えた崎岳出会ったのだが、ただの喋るリングだ。））

「ところでBR。ここどこ？」

（どこか知りたいなら、ここから北にずっと行くといいよ。）

「分かった。行ってみるよ。」

（（この話は、いつ進むのか第二章ではきつと進むはずである。））
「待っているお、東のどこかあ」

第二章　巨兵

（おい、待て）

「？。なに？」

（いまなんて言った？）

「東のどこか」って言ったけど」

（俺、北って言ったよな）

「マジかあ。」

（そして、BRと崎岳は歩き出した。実際歩いているのは崎岳だけだ）

　数日後

（どこか知らない小さな街が崎岳の前には広がっていた）　しかし・・・

「ついたあ」

（ここだ。）

「誰もいないじゃん」

人の気配が全然しないぞ。

（あれ、おかしいな。そう言えば、あんたさんの名前を聞いてなかったな）

「今頃かよ、俺は崎岳　流」

（崎岳　流があ。改めてよろしく。・・・）

（「！？」）

（「だれっ」）

（（崎岳の前を少女が駆け抜けて行った。））

「よし、追いかけるぞ・・・？」

ドン、ドドン、ドドドド、ゴオオオオオオオオオオ

（（意味の分からない大きな音に恐怖を覚えながら振り返る崎岳））

「何これ・・・」

（崎岳伏せるおおおおっ）

（（BRの一声でどうにか体の動いた崎岳の頭の上をすごい勢いで何かが通り過ぎて行った））

「やばくね。」

（取りあえず逃げるぞ）

「言われなくてもっ！」

「もしかして、さっきの女の子もこれに、お、追われてた、のかなっ」

（巨大な割には動きが遅い。ところでリュウ足早いなあ・・・！？）

（（BRは、何か異変に気づいた。））

（おいおい、早すぎね。時速70kmオーバーしてんだろっ）

（それでも、あの巨兵は追いかけてくるっ。！！！！）

（まえまえまえ！！）

「さっきの女の子！！」

（（すごい早さで走っていた崎岳。さっき目の前を通り過ぎた少女を目の前に見つける））

「そのっ！？・・・消えた・・・」

今日は驚いてばかりだな。

（お前の走るスピードに俺は一番驚いた。）

「で、あの女の子は？」

（テリージョンだろ。それはいい。説明は後っ）

「そうだな、その前にこの巨大な生き物をどうにかしよう」

（リュウ！手を前に！！ 違う！リングのついた方！！）

「こうか？でもなんでっ」

（（いきなりリングが光る。そこに出てきたのは！きたこれ。銃だ

っと思った崎岳。・・・）

「何で刀!？」

（よし、成功!そのまま止まって、取りあえず今回は刀の動く通りに本能のまま動けっ!）

「よし、やってみよう。」

（崎岳は、刀が自分に染み込んでくる感じがわかった）

「どりゃあああああ」

（巨兵は死んだ）

「疲れるわあ」。手首は変な方向に曲がるし、何もしてないのにボロボロだよ・・・」

（でも、あの刀良く使えたな。やっぱりすごい奴?）

「どうした?」

（いやっ何でも、）

「ところで走ってる時に見た、ちよつと茶色があった、ショート・・・身長は俺よりちよつと低い?ぐらいの女の子って、なにしたの?」

（レポートみたいなもんをしたんだよ。すぐに使わなかったのは、テリュージョンっていう特殊な能力だったからだろうな。）

「へえ」。何かむつかしいな。」

（ところでリュウお前の身長いくらだ?）

「ん、167cmだったけっ。じゃあ、あの女の子は162cmぐらいだったのかな。」

「よし、また。人探るか、次はあんな怪物に合わなくてすみように。」

（今日の経験で二度とあんな感じの怪物はゴメンだと思った崎岳だったのだが。）

ずずず、ズドン、ドコツ、ずただだあああああ

（崎岳の背後には大きなものが迫っていた。）

（「・・・そういふ事ね。」）

第二章～END～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0261z/>

～ 鏡 ～

2011年12月1日16時51分発行